

勝道の宝鬘 第3 5偈6偈

五、成就者が伝える口訣に^{かたよ}偏りなく依れ ← 修正お願いします

(温子先生に確認済みです)

ལྷན་ཐོབ་བརྒྱུད་པའི་མན་ངག་ཕྱོགས་མེད་བསྟེན།།

どうプ とプ ギゅ ペ めん ンガク ちょク め てん|

成就者 流れ 口訣 偏りがない 頼る・依る

2024年4月21日 ドルズィン・リンポチェご法話@日吉

成就者というのは、今までのラマ、先生方、カギユ派の中にもこれまで素晴らしい先生方がおられますけれども、そういう先生方の指導や口訣の教えがありますので、こういうものを実践していきます。また実践する際に、チベットにはカギユ派のみではなくてニンマ派やゲルク派などさまざまな宗派があります。これらの宗派にもまた同じようにすばらしい先生やラマがたくさんおられますので、こういう先生方からも、機会があれば偏りなく学ぶことが良いことです。

Khenpo Karthar Rinpoche, THE INSTRUCTIONS OF GAMPOPA :

A Precious Garland of the Supreme Path

成就者の系譜の教えに偏りなく頼らなければなりません。成就したヨガ行者のさまざまな系譜の真実の教えすべてに、偏りのない敬意と崇拜の念を持つということです。何を学ぶにしても、ルン（口訣）とティ（教え）を正式に受けることが重要です。しかし、甚深な教えに出会ったらそのテキストを読むのがよいでしょう。そのように公平にするのは、この時点では、何が私たちを悟りに導くか分からないからです。心の本質を理解するきっかけとなるのはどのような教えなのか分かりません。ですから、出会ったどんな真実の教えも拒否しないことが大切です。

『ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道』 pp.53-54

「七つのターラー菩薩讚」第3偈のご解説

法、心にまことに生ぜずば 仮説の言語を遁いかけて

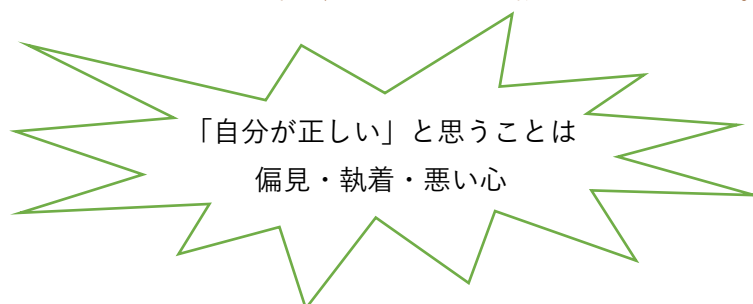
悪しき教えにだまされん 仏母、まことなる天母よ守れかし

さて、「法、心にまことに生ぜずば」ですが、なぜ生じないのでしょうか。それは仏法の、あるいはすべての道の本質が慈愛だということを、理解していないからです。それで「仮説の言語を追いかけ」ます。たとえば、仏教にはいくつかの異なる教義があり、その間で論争が行われることがあります。しかしこの論争は、お互いの法の理解を洗練するためにあるのです。議論し反論するので、まるで争っているように見えますが、実は議論は、すべての種類の誤謬を取り除き、理解を洗練していくためにあります。喩えるならば、ふたりの友だちがお互いの顔を洗い合っているようなものです。ですから議論は必要です。

ですが愚かな人は、議論の言葉を使って、人を操作し政治的に利用します。「うちの宗派は正しい。あの宗派は間違っている」と言います。あるいは宗教間でさえ、「仏教を信じてはいけない。仏教は良くない。仏教徒は地獄に堕ちる」などと言います。あるいは仏教徒が「他の宗教を信じてはならない。彼らは間違っている」と言います。人を貶めれば必ず相手も貶め返しますから、このようなことが起こります。そもそも自分をいちばん大切に、「私の方が優れている」、「私の法は正しくて他はみな間違いだ」と考えるからです。これは本当に困ったことで、仏教の歴史の中でも起こりました。論争で聞いた言葉を政治的に利用する人々がいました。そのせいで多くの邪見が人々の心に植えつけられました。そうすると法の本質である慈愛を失ってしまいます。すべての法、すべての宗教には、慈愛と悲心と忍耐があります。このレベルで争いはありません。

私たちは、修行者としてどうするべきかを考えなくてはなりません。どの伝統でも、それに従い修行するのは良いことですが、他を貶めてはなりません。論争が必要なのは系譜を守るためだと理解してください。各々の系譜は、喩えるならば外箱です。箱の中身は明らかに同じもの、慈愛です。ですから、世の中のどの宗派もどの宗教も有益です。もしも少しばかり有害に見えたとしても、それは宗教の過失ではなくて人の過失です。「これが本ものだ」、「私の方が良い」などと考えるのは偏見です。

「私の宗教、私の宗派はすばらしい」と考えるのは、一般的には良いことです。なぜならそれが信仰であり浄見だからです。ですが、もしあなたが「他は間違っている」と考えるなら、あなたの方がもっと間違っています。それは大きな間違いです。なぜなら、決して心を支配されてはならない三つの状態は、貪欲（または肉欲）と、悪心と、邪見だからです。「私たちの宗教が最高だ」と考えるのは、貪欲あるいは執着です。「彼らは間違っている、彼らは悪い」と考えるのは、悪心です。邪見とは、偏見によって歪められることです。たとえば良いものを悪いと考え、悪いものを良いと考えるなら、その偏見のために現実を歪めて見てしまいます。ジクテン・スムゴン大師は、この大切さを説いておられます。



2025 年元旦 ドルズィン・リンポチェのご法話@DTDL「七つのターラー菩薩讚」より

世界の中にはたくさんの教えがあり、無宗教の外道といわれる人もいます。みな自分の考えを信じているわけです。仏教徒であるならば、空性や因果応報など心に平安が起こるような教えを信じて、そのために努めるわけです。心の平安が目標です。ただ、私は仏教徒なのでそれ以外の教えを下に見る、区別する、分断する、ということは仏教徒の教えに反するものになります。仏教の中でも大乘、小乗というようにさまざまな宗派や流派があります。これらの中で自分の流派を大切にすあまり、他の流派を見下すような心が生じては、煩悩をなくすどころかかえって煩悩を増やす原因となります。仏教の中でも特にチベット密教ですと、ニンマ派、サキャ派、カギユ派、ゲルク派などの宗派があります。自分はカギユ派であるというふうに考えるのは良いことですが、そう思うあまり、他の宗派へのリスペクトがなくなることはいけません。他のすべての宗派への敬意も必要であるということです。自分はこの教えに従い修行していくが、他の教えでも解脱することができる、みなそれぞれ素晴らしいものであるというふうに、リスペクトをなくしてはいけません。

世界中で外道、仏教徒以外の、また教えの違いによる争いがたくさん起こります。宗教間の争いは世界中で起こっています。自分の宗派を大切にすあまり他を間違っていると言うことは、大きな間違いです。輪廻から脱するどころか、その中に逆に落ちる原因となります。煩悩の元となってしまうわけです。我執を取り除くどころか、かえってその我執を増やす元になっていきます。こうならないように、自分や一切有情をそのような間違いに陥ることから守ってくださいとターラー本尊に祈ります。すべての教えに対する敬意を、そして自分の教えを大切にすあまり輪廻の中にかえって落ち込むような煩悩が増えないように、間違った教えに騙されないようにということです。このようにターラーに守ってくださいとお祈りを捧げます。

煩悩に負けはかなる菩薩らの 罪を語れば自分が衰える
大乘学ぶすべての人々の 罪を言わぬが仏子菩薩行 (32)

名利に負けて互いに争えば 聞思と修の行い衰える
親しき友や施主の財への 執着捨てる仏子菩薩行 (33)

『ガルチェン・リンポチェ法話集2 清浄の道』 pp.56-57

「悪しき教え」は、「私たちは正しい」、「私たちの系譜は正しい」、「彼らは間違っている」、「彼らは悪い」と考える心のことです。教義そのものを指しているのではありません。誰かの教義が悪いと言っているのではないのです。過ちは教義そのものではなく、教義に対する人の見解にあります。教義の良し悪しではなく、心の状態の良し悪しを言っているのです。

悪心は邪見の心でもあります。特に邪見は、直ぐに報いが出る五悪のひとつと言われます。

「仮説の言語」は邪見となります。敵意と邪見は三悪趣に生まれる因ですが、系譜に固執するとそうになってしまいます。「だまされん」と説かれるのは、自分を悪趣へ落とすのは、実は自分自身の怒りと嫉妬の心に他ならないからです。まさに自分で自分をだましています。深く理解せずに、事実に基づかない「仮説の言語を追いかけ」るなら、この邪見は無知です。「言語を追いかけ」ることによって、誤解、邪見、悪心、敵意などが生じます。これらは畜生、あるいは地獄に生まれる因となります。これらの因を、仏法を修行することで作ってしまうのです。自分で自分をだまし、仏法を修行しながら悪趣の因を作るのです。

ここで、「守れかし」と述べられていますが、どうやって守ればよいのでしょうか。このような状況になったら、何も考えてはいけません。それについて考えるのを止めて、ただ浄見をもちます。つまり、ただ菩提心を信じます。菩提心すなわちターラー菩薩です。

り め てん べ くる ち だく きる しえ |
てん べ に ま がる ちえん しゃブ てん そル |

不偏の教えて我執を取り除く | 法の太陽ガルチェンすこやかに |

り め impartial, non-sectarian movement, respect for all traditions, unbiased
山

境界のない（19世紀のチベットで、宗派間の対立を最小限に抑え、さまざまなチベットの伝統のテキスト、解説書、手順を活用することで精神修行を活性化させることを目的とした運動）

Wikipedia より

19世紀のカム地方で、世俗的、政治的関心を捨てたりメと呼ばれる運動が興り、チベット仏教を再活性化させる新たな息吹をもたらした。これは、宗派の壁を超えて仏教のさまざまな相承系譜を収集し、多様なものを多様なままで不偏的に平等に扱い、複数の伝統を混ぜ合わせることなく包括的・統合的にアプローチしようとするものであった。チベットの文化的ルネサンスとも評される。

サキャ派のトゥルクでテルトンのジャムヤン・ケンツェ・ワンポ（1820-1892）、カギユ派のトゥルクであるジャムグン・コントウル・ロドゥ・タイエ（1813-1901）、ニンマ派のテルトンであるチョーギェル・デチェン・リンパ（1829-1871）の3人が協力しあってこの運動を主導した。ジャムヤン・ケンツェが発起人で、ジャムグン・コントウルが運動を取りまとめる役割を果たした。リメパたちの活動はデルゲ王国の宮廷と、当地のサキャ派、カギユ派、ニンマ派、ボン教の寺院ネットワークの支援を受けた。

この運動は今日に至るまでチベット仏教に影響を与え続けており、近現代ではディンゴ・ケンツェ、カルマパ 16 世ランジュン・リクペー・ドルジェ、チョギヤム・トゥルンパ、ダライ・ラマ 14 世を初めとする、多くのラマがリメの理念とアプローチを受け継いでいる。

じんじん

六、自と他を益する甚深な物質・薬・真言、縁起に依れ

རང་གཞན་ལ་ཕན་པའི་རྣམ་སྟན་ལྔ་གས་དང་རྟན་འབྲེལ་བའོ་བརྟེན།

らん しえん ら ぺん ペ ぜ めん ンガク たン てん でル さブ も てん|
自 他 利益 物質 薬 真言 縁起 深い 依る

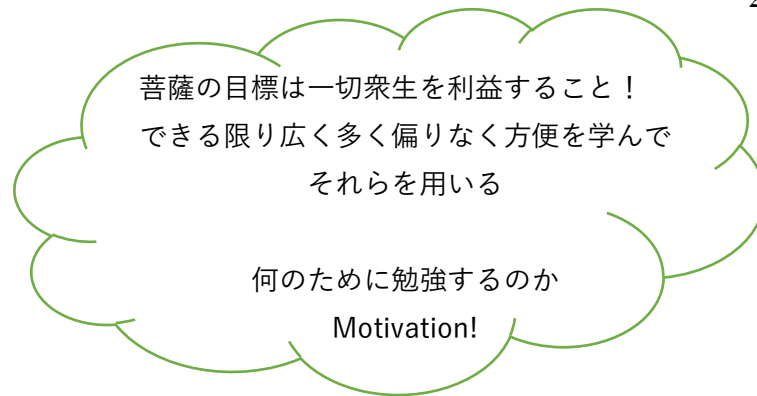
Khenpo Karthar Rinpoche, THE INSTRUCTIONS OF GAMPOPA

自分にも他人にも有益な物質、薬、真言、さまざまな縁起に頼らなければなりません。「私は悟った行者だから何も必要ない。病気になっても薬はいらない。外的なことを気にする必要はない」という態度はいけません。あなたはまだ悟りに至っていないのですから、四大元素から成る肉体のなすがままです。四大元素のバランスと均衡を保ち、健康になる条件を作り出さなければなりません。正しい治療など、自分の健康に有益なさまざまな条件を拒否してはいけません。同じように、他人のためのこれらを拒絶するのもいけません。薬や食べ物、その他の一般的なものを与えて他を利益することについて、浅いだとか重要でないとか考えてはならないのです。なぜならこれらのものは全て、適切に取り入れるならどれも他を本当に利益するからです。「私は密教の行者だ。科学を拒否していいんだ。医学を拒否することもできる。これらは世俗的なもので、永続的な意味はない」などと考えてはなりません。実際にこれらは大きな恩恵をもたらすもので、頭ごなしに否定すべきではありません。

2024年4月21日 ドルズィン・リンポチェご法話@日吉

自分と他を益するというふうにありますけれども、自分と他人のためになることは、今生で何であれ学んで実際に行う。他人のため、自分のためになることは、そういうふうに全てを行っていく必要があります。

今われわれは人という素晴らしい機会を得ているわけです。行う機会があるならば、その機会を失わずに、無駄にすることなく、実践していく必要があります。物質というのは物ですけれど、たとえば財産とかお金とかそういうものです。そして薬は病気の人に与える薬、真言というのは加持の力があるものですけれども、こういう方便の道はどのようなものでも、学んで他人を利益するために用いていきます。学んだ後に、他を利益する、人のためになることをするんですけども、菩薩という方は、まずは全てを学ばれます。これは良いこれは悪いというふうに分けてこれはやらないとかいうのではなくて、まずは全てを学んで、後に他のためにそれらを使われます。学んだとしても、学んだものを自分が何かよくなるためだけに使うというのはまた間違いで、他のために、他を益するためにそれらの学んだものを用いていきます。



また一つには、自分の身体を益するようなものに依る必要があるというふうに説かれて
 いると取ることができます。自分の身体が長く生きられるように、そのためになるもの
 とるべきである。たとえば自分の身体のためになるような食べ物や服を用いる。また自分
 の身体に益する薬をのむ、また自分に加持のある真言というものをを用いる、そういう良
 い方法を行うということです。

こういうを行うときに自分の身体というものに執着して行うのでは、それはまた間違
 いです。まず長生きするのはなぜかといいますが、それは利他を行うためです。長く利他を
 行うために、まずは自分の身体、健康というものに気をつける必要があるわけです。ある人
 はあまり自分の健康を顧みずに薬をのんだりもせず、また健康に気をつかわないために睡
 眠も特にとらずに勉強ばかりしているような人がいます。こういうふうにして身体もどん
 どんやせ細って力もなくなって寿命が短くなってしまいう人がいますけれども、こう
 いうのもまた間違いなわけです。身体は健康というものにも気をつけなければいけません。

中観の『四百論』の中にも、「身体は敵のようではあるけれども、身体を守り育まなけれ
 ばならない」ということが説かれています。これはいったい何かと言いますと、この私たち
 の身体によって私たちはさまざまな煩惱を起こしますし、執着というものを起こします。そ
 してこれによって三悪趣、地獄・餓鬼・畜生に生まれる原因というものを作っていきます。
 私たちは身体を守るためにたくさんの努力をして、身体の奴隷のようになっています。この
 身体のために非常な苦勞をするわけです。でも、だからといってこの身体を捨てるというの
 ではなくて、やはり身体を守る努力をしなければならぬわけです。こんなたいへんな身体
 はいらないといって捨てていくのではなく、守らなければならないわけです。それは何故か
 と言いますと、この身体によって私たちは因果の法というものを理解できるわけです。この
 身体によって善を為そうということを思うことができるわけです。そのように努力してい
 けるのも、この身体があるからこそ、そういう善を積むことができるわけです。そのように
 考えますと、長生きをすることによって自分の積める功德というのも大きくなっていきま
 すので、善を行い功德を積むためには長生きをする必要があるわけです。そのようになるな
 らば、長生きをすることによって自分にも利益がありますし、他にも利益が大きくなるわけ
 です。

暇満の人身

自利も必要だが、それはこの身を利他に使うため！

ときどきですね、この、人に生まれるということが素晴らしいということを理解できない人がいます。たとえば、何か仕事をしたりしてうまくいかない、他の人から何か軽蔑されたりして悲しい、いろんな苦しみがあると考えて、自分なんて居ても仕方ないんだと考えて、酒を飲んで飲んだくれてしまうような人もいます。ですが、こういうふうにははいけません。仕事がいくらうまくいなくて苦しいことがたくさんあったとしても、福德を積むことができるいま自分の身体があるからです。身体には価値があるということを、まずは思いません。この身体というものを、たとえ自分の商売など何かがうまくいかなかったとしても、自分自身が功德を積んでいくためにこの身体を守り育むんだというふうに考えていきます。

また、いま自分がおかれているたいへんな状況というのは、なぜそのようなたいへんな状況になっているかといいますと、それはこれまでに自分が行ってきた悪い行い、不善の行いの結果として、このような苦勞が起こってきているわけです。そう考えますと、来生に同じようなたいへんなことが起こらないようにするためにも、今この時に善を行おう、善行を積もうというふうに考えます。そうしますとこの身体の価値というものが分かってくるわけです。

またある人は、自分自身が、たとえば太っているとか見た目があまり美しくないとかで人に嫌われる、他の人はみんな格好良かったりきれいだったりするのに私はそうじゃないわというふうに考えて、心が落ちてしまう、そういう人がいます。また、私は友人もないし誰も自分を愛してくれないんだ、こんな身体はあっても意味がないんだ、というふうに考えるような人もいますけれども、この考え方も間違っています。もし他の人が自分を愛してくれるならば、それはもちろんいいことなんですけれども、他の人が自分のことを好きになってくれないならば、それはもうどうしようもないことです。こういうふうに好きになってもらえないというのは、これはもう業（ごう）の関係ですので、どうすることもできません。

ですが大事なのは、いま自分が法を行って功德を積んでいくということなわけです。たとえば他の人が自分のことを嫌ってもそれは仕方のないことですし、だからといって自分も相手を嫌うというのではなくて、自分は相手を好きだというふうに相手を大切にしていけることが必要なわけです。そして自分自身の身体を守り育むために、努力をしていきます。忍耐を修習し、慈悲や知識を高めていく、善い行いに努めていく必要があります。

心の中に、努力をする心の力は誰にでも備わっています。たとえばそれぞれの土地、たとえばみなさんならば日本ですけれども、日本でも偉い人とか素晴らしい人っていうのはいますけれども、私とそういう人たちとは全然ちがうというふうに考えるかもしれませんが、実は心の中の力というものは同じです。ただその考え方ややり方が違ったためにそ

ういう違う状態になっているというだけで、心に持っている力というものは同じなわけです。ですので、今このときに自分は仏となるために努力しようというふうに考えて努力していく必要があります。

そういうふうに考えて努力していきますと、この人生で長生きすることによって他を利益する、他のためになることができるわけです。ですので、友だちがたくさんいようが、もしくはいなかったとしても、自分の身体に意味があることが分かっていくわけです。もし心の中に愛や慈悲、智慧というものがあると、自分自身の心は楽しみを感じていきます。そして自分自身の身体の大切さというものが分かるわけです。ですので、そのように自分の身体を守って自他を益する、自利・利他のどちらも行っていく必要があります。

「仏になる・悟る」とは、
自在に利他を為せるようになる、ということか。
そうすると暇満の人身を得た今生での私たちの課題は、
この身をどのように利他に使っていくか、ということ。

- ・まず「私は正しい」を止めよう
- ・縁があれば偏りなく学ぼう
- ・なんであれ来たタスクは引き受けよう

おまけ

「心の中の力」…たぶん、如来蔵のこと

WikiArcより

如来蔵：梵語タターガタ・ガルバ (tathāgata-garbha) の漢訳。原義は如来の胎児、如来の母胎のどちらをも意味する。煩惱に覆われている衆生の中にある如来と成り得る可能性のこと。

野田俊作の補正項2012年4月26日「法身遍満（3）」

典型的な日本の「あるがまま」思想である天台本学思想では、如来蔵があることに気がつくだけで救われて、そこで修行は終わることになっている。これに対して、チベット仏教では、如来蔵があることを知るのは修行の出発点で、それから何生にもわたる菩薩道が待っていて、しかも最終的には無住处涅槃といって、悟ることなく衆生とともに輪廻転生し続け、永遠に衆生を救済し続けることを理想にする。その違いは、どこから起こるのか。

これは実は瞑想体験から起こる。チベット瞑想をしていると、かなり簡単にサマーディ（三昧）の状態に入れる。最初、シャマタ（静慮）といって、ある対象の上に心を置いておくのだけれど、あるとき気分がフッと変わって、無理に対象の上に心を置いておかなくても、心が静まった状態でおれるようになる。これをサマーディという。サマーディの中で、いつもではないが、ヒエロファニー（聖体示現）が起こる。すなわち《聖なるもの》の臨在を感じる時間がある。それを私は《法身顕現》と呼んでいるのだが、それが起こったからといって、世界はもとのままだ。法身に浸されたら、スーパーマーケットで百円で買って来た茶碗が百万円の宝物に変身するというようなことは起こらない。同じように、法身に浸された私も、なんのことはない、もとの私のままだ。

この体験があれば、法身顕現からただちに「あるがまま」的一元論になってしまうことはない。理想世界や理想の自分は確かに見たが、法身顕現が終わると、百円の茶碗は、相変わらず百円の茶碗だ。それがほんとうの宝物に変身するまでの道は、気が遠くなるほど遠いけれど、そこを歩いていくこと自体に「生きる意味」がある。この考えはアドラー心理学風だ。アドラーは、「神とは人間の理想像であり、人類はそれに向かって進化するのだ」と言っていた。けれども、永遠にその理想には到達しない。つまり無住処涅槃だ。

松本史朗先生の影響で、1990年ごろ以来、反如来蔵思想だったが、ここしばらく徹底的に文献を読みなおして、如来蔵思想の位置を見つけたので、もう一度、そういう世界で暮らしている。